

東京多摩地区現代俳句協会

多摩のあけぼの

会報 No.155



二人の境涯俳人に触れて

辻 升人

「村上鬼城」

(一八六五年六月十日～一九三八年九月十七日七十三歳没)

鳥取藩士、小原平之進の長男として江戸小石川に生まれるが、八歳の時、群馬県高崎市に移り住み、十一歳の時に母方の村上家の村上源兵衛の養子となり村上姓を名乗る。一八八四年に東京へ行き、軍人を志したが耳疾のために断念し、明治法律学校で法学を学びながら、司法代書人となった。父の勤務先である高崎裁判所司法代書人となる。以後、鬼城はなくなるまでの一生を高崎で過ごした。

その傍らで俳句を嗜み、広島市の大本営に居た正岡子規に教えを請い、幾度となく「ホトトギス」に俳句の投書を行っていた。

多摩風土記(西武国分寺線)
西武鉄道国分寺線(国分寺)東村山間は明治二七年(一八九四)、同鉄道の中で最も早く開業した。翌二八年には川越まで開通。川越鉄道と称し、甲武鉄道(現中央線)飯田町駅への直通列車も運行された。昭和二年の西武鉄道村山線開業まで、西武軌道(後の都電新宿線、所沢延伸を構想)等、中央線を迂回せぬ都心直通路線が模索された。(小山健介)

た。子規の死後、彼は「ホトトギス」主宰である高濱虚子から句を見てもらうことになるが、高崎での俳句会で虚子の推挽を受ける。それが契機となつて一九一三年から「ホトトギス」の同人活動を始め、一九一八年に自身の作品が入選。以後は司法代書人の傍ら俳人、また選者として敏腕を振るうことになった。八人の娘と二人の息子を儲け子室に恵まれたが、生活は絶えず困窮していたという。然しながら人脈は厚く、五一歳の時に代書人を解雇された時には、虚子門下の弁護士を立てて復職を遂げている。一九三八年七月ごろから胃腸病を患つたとして高崎市の自宅にて静養に入り、九月一七日に家人や門人に看取られながら、胃癌のため自宅で死去。

自らも不遇な環境に置かれていたため、困窮した生活や人生の諦念、弱者や病氣への苦しみなど、独特の倫理観で憐れみ、悲しみを詠った句が多いのが特色である。また、本人も耳が不自由だったためか、身体障害者に対する感情を詠ったものが多い。座右の銘が「心眼」ならぬ「心耳」であつたことから、今日では「心耳の詠み人」と呼ばれている。

冬蜂の死にどころなく歩きけり

鬼城

冬蜂に老残の身の感慨を託しているのである、彼の生物への愛情には、どこまでも自己憐憫の影が付きまとう。

闘鶏の眼つぶれて飼はれけり

鬼城

鷹のつらきびしく老いて哀れなり

々

〔富田木歩〕

（一八九七年四月十四日―一九二三年九月一日）二十六歳没

誕生の翌年、高熱のため両足が麻痺し生涯歩行不能となる。俳号の木歩は、彼が歩きたい一心で自分で作った木の足に依る。富田木歩は歩行不能・肺結核・貧困・無学歴の四重苦に耐えて句作に励み、「大正の啄木」と言われ将来を囑望されるが、関東大震災で焼死した。

少年期

木歩は小学校に行きたかったが、身体障碍と貧しさのために小学校に通えず、無就学児童となった。当時の「いろはかるた」や「軍人めんこ」で文字を姉の富子や久子に読んでもらい覚えた。巖谷小波のお伽噺や小波主筆の「少年世界」を読めるようになった。少年雑誌のルビ付きで難しい漢字をも会得した。また小波の俳句によって十七文字の日本特有の短詩の存在をおぼろげに知った。大好きな少年雑誌を読むことと、そのころから見よう見まねで始めた俳句だけを心の支えとして、吟波の俳号で俳句の試作を始めた。木歩の俳句との出会いは一九一三年、少年雑誌の中にあつた巖谷小波の俳句のページに惹かれ、俳句を作るようになったという。

青年期

一九一五年、木歩は臼田亜浪に師事、「石楠」に投句した。臼田亜浪の真実を重んじる句風なり、生き方なりに共鳴するものがあつたからだつた。現実の中で現実を詠んでいくよりない、苦しくても貧しい身の回りであるうとも、それを現実としてガッチリ受け止め、その生活の中に詩を見つけていくより仕方ないのだ。木歩はそういう文学観、人生観を自然に会得していった。木の足に頼らぬことをあきらめるより仕方なくなつて、歩けない自分のままで生きるしかないのだという覚悟が、揺るぎなく坐つてきたように、一つの人生観が出来てきたともいえるのだろうか。木歩の置かれた過酷な境遇と、純真な才能あふれる青年像、これは生涯の友となる新井声風にも驚きであつた。

新井声風とのかかわり

一九一七年、当時二十歳の声風は慶応義塾大学の学生であり「やまと新聞」の俳句欄を通じて知った「石楠」の臼田亜浪を師としていた。声風は、悲惨な境遇にありながら、清新な句を詠む木歩に前から興味を抱いていた。その年の初夏、本所仲之郷に住む、「小梅吟社」の木歩を訪ねた。狭い住まいの机には「正岡子規遺稿」「鈴木三重吉選集」が積み重ねてあつた。ここで木歩は同じ歳の声風を知り、二人は生涯の友となる。何不自由なく育つた声風と何もかも不自由な木歩、この二人は尊敬あつて俳句の良き仲間、生涯の親友となつて行く。身体障碍と貧困のために、小学校にも通えなかつた木歩が、ここに大学生の友人を得て、新しい芸術的感覚・雰囲気に触れる事が出来た。一九二二年の春、声風は「石楠」主宰亜浪との確執から、「石楠」同人を辞退した。木歩も「石楠」退会届を亜浪あ

てに提出した。「石楠」を退会しても木歩は発表先に不自由しなかった。

「山鳩」「俳諧雑誌」「初蟬」、これらに木歩の句や文章をこぞって掲載してくれた。この間木歩には、母・兄・姉と不幸な出来事が多く重なり、加えて本人の病苦に悩まされては来たが、それでも声風はいろんな面で木歩への援助は惜しまず増々二人の友情は深まっていた。しかし、ついに最も過酷な運命の日が、木歩と声風の上に襲い掛かった。

関東大震災と木歩死去

一九二三年九月一日午前十一時五八分、激しい大地震が関東地方一帯を襲った。下谷の凸版印刷で地震にあった声風は、浅草瓦町の自宅に戻って無事を確認すると、親友の木歩のことが気になった。吾妻橋を渡り須崎町の木歩の家に着いたが人影はなかった。声風は引き返して、再び土手の上を探し回った。人混みの桜の木の下にゴザを敷いて木歩はいた。木歩の帯を解いて、声風はそれで木歩に体を自分の背中にくり付けてもらった。一先ず浅草を目標にバラバラ逃げた。火の手は方々に上がっていた。それに追われて右往左往する人々で、土手の上の混雑はものすごかった、背の高い声風であったが、腰から下は極端に痩せているとはいえ五十キロを超える体重の木歩を背負っているのだ。やつとの思いで大川にそそぐ源森川の近くまで来た時、枕橋はすでに燃え落ちていた。浅草への近道は断たれ、小梅町方向へ引き返そうとした、ところが行く手にはまた新たな火の手が上がった、川を除いて三方は全く火の海となつて迫ってくる。川の淵に出るには鉄柵を越えなくてはならな

い、背負ったままでは越えられなかった。傍の人に頼んで木歩を降した。鉄柵を超えさせた木歩を、堤の上に腰を降ろさせて声風は屈み込んだ。生きる道は泳ぐしかない。声風は自分一人でも泳ぎ切れるかどうか自信はなかった、まして、足のきかない木歩を連れてでは、半分も行かないうちに溺れてしまう。

声風は「木歩君、許してください。もうここまで来ては、どうにもなりません」という声とともに、手をさし伸べた。木歩は黙ったまま声風の手を握り返した。声風は大川に身を躍らせた。数時間後、漸く対岸の竹屋の渡し付近に辿りついたとき、見返る声風の眼に向島の土手を火の旋風の走るのが見え、次の瞬間、土手の人影は消し去られていた。木歩は焼死した。二十六歳の生涯であった。

背負はれて名月拝す垣の外

木歩

枸杞茂る中よ木歩の残り居る

〃

かそけくも咽喉鳴る妹よ鳳仙花

〃

死に近い妹の咽喉の微かな喘ぎを、看病しながら聴き取っているのである、その仄かなはかない感じが鳳仙花に通い合うのだ。鳳仙花は女の兒たちが花弁をもみつぶして爪を染めたりして遊ぶ花だ。おそらく作者は、妹の幼児のそのようなさまを思い浮かべているのだらう。情愛の滲み透った句である。一番苦勞したらしい薄命のこの妹は弟とともに、彼が最も愛情を注いだ肉親であったのだらう。

(インターネットと山本健吉著「現代俳句」から引用)

「思いやり」「優しさ」「感謝」これが私の俳句の基準です。

あけぼの集

蟬丸の弾きし琵琶や朧月八王子青木 隆
 目ん玉の水をとおつて万緑来八王子赤野 四羽
 若葉風木偶の身ぶりのもの悲し国分寺秋山ふみ子
 花御堂仕上げの子らの坊泊り多摩 足立喜美子
 巢箱組む月のかたちに穴を抜き小 平安達 昌代
 若葉風わたしに翼をくれないか清 瀬 穴原 達治
 あ頃の吾に会いたい絮たんぽぽ 稲 城 新井 温子
 生き物のごときスマホや冷奴八王子荒川勢津子
 ここだけの話海月が寄つてくる町 田 有坂 花野
 蚕豆や個室に籠る過保護な子 狛 江 有原 雅香
 夏草や草莽という 志 国分寺 安西 篤
 その日まで待つて下さい天の川 東久留米 飯田 玉記
 右脚の上がらぬベッド日雷多摩 石川 春兔
 子らなりの折り合いつける夕焼け雲小 平 石橋いろり
 水の春坂東太郎滔々と青 梅 一ノ瀬順子
 乳飲み子の形に汗のあるシーツ日 野 一関なつみ
 軍艦は無言わたしは蝸牛 狛 江 伊東 類

妻が居るなんぢやもんぢやは花盛り町 田 稲吉 豊
 含羞のひとりになりたい麦の秋 京 都 岩佐ひすい
 差し伸べし手はラストダンス涼夜かな 武蔵野 内田 牧人
 山桑の実を摘むからだ伸ばしきり 武蔵野 江中 真弓
 水葬のもたらす花よ暮れる海府 中 大井 恒行
 国分寺跡にふやけて春惜しむ府 中 大石 雄鬼
 吾の中の仏の不眠戻り梅雨日 野 大槻 正茂
 ひらひらと水切り抜いていく金魚川 崎 大西 恵
 カーネーション赤き色とぞ覚えける三 鷹 大森 敦夫
 憲法記念日わたしの好きな第九条 昭 島 岡崎たかね
 知らぬ間に傷増ゆる脚籐椅子かな三 鷹 小川 紅子
 並びたる子鴉尾長ぎやあていぎやあてい三 鷹 小川 葉子
 清明や命紡いで暮らしつゝ飯 塚 奥野 亜美
 木洩れ日や螢袋の咲く谷に川 崎 尾崎 太郎
 麦飯や薄れる昭和蘇り 昭 島 尾関 英正
 シヤツ干せば炎天どんとおりてくる青 梅 小野こうふう
 夏雲やここぞといふとき湧く力立 川 片倉みちこ

あけぼの集

夏めくや大きな声でグアテマラ 昭 島 亀津ひのとり
 若葉風足腰叩けば全方位 西東京 河 順子
 やつと生きて竹の子茶碗蒸し 立 川 川島 一夫
 箱根神社へ尻押す娘青葉風清 瀬 神崎 幸子
 沸騰する地球の端に金魚飼う 小 平 城内 明子
 虹色のドレスフルート四重奏 熊 本 貴田 雄介
 茉莉花の香に誘われて回り道 大 田 小泉満知子
 その時の心を映す花の色 三 鷹 高坂 栄子
 おしゃべりの輪から外れて花ぐもり 西東京 幸村 睦子
 遠来の客見上げたる青実梅 小 平 後藤 行雄
 無為の日のつみかさなりて花の屑 府 中 小林 育子
 汽笛一声 春愁の真ん中を あきる野 小林マリ子
 止められぬ遠き内戦竹煮草 町 田 小山 健介
 カシワモチイタダキモノデスオスソワケ 立 川 齋木 和俊
 春菊をどっさり茹でて嫁姑多 摩 斉田 仁
 山笑ふ草木国土皆笑ふ 昭 島 坂本 空
 飛びたくて飛べぬ綿毛や走り梅雨 小金井 櫻 さとみ

五体不満足にて花吹雪浴ぶ 東久留米 佐々木克子
 文鎮の竜で押さえる青葉風 府 中 笹木 弘
 聖堂にミサの残り香薄暑光 府 中 佐藤 栄子
 てらてらと五月の清輝椿の葉 昭 島 佐藤 光子
 この星の瑕をふさぐや散る牡丹 調 布 佐藤 茉
 年経てもなお華やかにアマリス 八王子 柴 れいこ
 百合匂う眠れる父の顔まわり 杉 並 島 彩可
 映像派文字派あじさい絵手紙 派 足 利 清水 弘一
 時代遅れみんなさうなる真桑瓜 世田谷 鈴木 浮葉
 手間をかけ太さ異なる露を煮る 立 川 鈴木かずえ
 断捨離やレースの手袋捨てきれず 小 平 鈴木 寿江
 あっあーいっきいっせい若葉若葉 小金井 鈴木 佑子
 マシユマロの甘き香りや春の雲 板 橋 諏訪部典子
 看る人から看られる人へ茄子の花 小 平 関 梓
 麦の秋両目つむれば見えるもの 調 布 芹沢 愛子
 眉引いて別人とする夏の月 小 平 高瀬多佳子
 ものの芽のいのちあかあかやはらかし 西東京 高原 桐

あけぼの集

母居れば九十九歳昭和の日清 瀬谷村 鯛夢
 かぎ括弧だけですごして長閑なり 国分寺 玉井 豊
 若冲の乗興舟にのった夏の夢 稲 城 玉木 康博
 いずかたもロボット音声生ビール 日 野 玉木 祐
 隣組総中流化昭和の日立 川 田村 明通
 梅もぎの脚立に夕日暮れ残る三 鷹 田山 光起
 水音の花束となる泉かな 武蔵野 津久井紀代
 辛い日はそつと囁く子子に 八王子 辻 升人
 明日葉をたつぷり載せて島昼餉 清 瀬 寺島芙美子
 夏野原三步歩いて老いにけり立 川 遠山 陽子
 湧水の病葉浮かべ夏きざす 西東京 戸川 晟
 話しかけてくるのはペンペン草らしい 杉 並 飛永百合子
 初夏や還らぬ練習機の二人 清 瀬 永井 潮
 ひばり野が目の前私の好きな窓立 川 中條 啓子
 八十路てふ木なら大木万緑裡 西東京 中田とも子
 ポスターは花の旅へと我誘う座 間 長野 保代
 さつと雨グラスの氷ひとつ 囁む 府 中 中矢 温

秋待てぬ古米古古米古古米 武蔵野 夏目 重美
 卯の花や純真無垢といふ言葉 町 田 成戸 寿彦
 帰国せる盗難菩薩 日 雷 国分寺 南行ひかる
 白銀に蛇行きらめく雪解川 西東京 西川 五月
 父の日や子にプレゼントされし杖 世 田谷 西前 千恵
 雛あられ李朝の盆に少しかな 昭 島 西村 智治
 深海の父よ桜は見えますか 三 鷹 拔山 裕子
 浮舟や古城の壕の杜若 八王子 沼田 博古
 夏来たる帽子の色を変えてみる 三 鷹 根岸 敏三
 指ほそき人とつれそふ氷水 三 鷹 根岸 操
 紅白ピンクつつじセラピー 老団地 小 平野口 佐稔
 人類の代表としてバナナ食ふ 羽 村 野島 正則
 酢飯うつ窓いっぱい 青葉騒 青 梅 萩原 芙沙
 プレタポルテ着てホタルブクロかな 武蔵野 蓮見 徳郎
 囀りにかかわりたくなき一日かな 小金井 平井 葵
 桐の花ずかずかと来るメール 便多 摩 平山 道子
 減びつつ蘇りつつ 薔薇の花 八王子 広井 和之

あけぼの集

柵窓開けて子に見す春の雲調 布藤原はる美
 文机の夜半の灯漏る、棕櫚の花練 馬淵田 芥門
 花水木風のかたちの母と居る 国立前田 弘
 花水木持ち歩いてる糸電話 国立前田 光枝
 春よ春寝返り果たす赤子かな 国分寺 松井 彰子
 どくだみや元気良過ぎて嫌われる 八王子 松元 峯子
 ケガだらけ根くらべしている初夏だ 東久留米 三池 泉
 愛されてわがままになる赤い薔薇 東久留米 三池しみず
 木の芽時友は伴侶に先立たる 東久留米 三浦 禎三
 白日傘くるり八十路の下り坂 小金井 三浦 長閑
 茎立ちの盗まれていく余生かな 世田谷 三浦 文子
 聖五月身体からだの中を風が吹く 町田 三木 冬子
 山百合やここは日暮れの無人駅 東大和 水落 清子
 新緑やいつかやさしくなれる刻 三鷹 水野 星間
 棘魚とげういの稚魚突如突進風光る 日野 満田 光生
 春風といっしょに入る喫茶店 昭島 宮腰 秀子
 もぎ立てトマト背面跳びの味がした 調布 宮崎 斗士
 話せない秘密のふえて春の雪 国分寺 武藤 幹

水無月の知らずに過ぎし白い花 小金井 村井 一枝
 出奔の懺悔を重ねしやぼん玉岐 阜村山 恭子
 初夏の森仰ぎ小さな空の数熱 海望月 哲土
 花種を蒔いて何やら使命感 東村山 森本由美子
 万華鏡にわたしのかげら若葉冷え 三鷹 守谷 茂泰
 ただ歩く緑の風を浴びながら 町田 山崎せつ子
 万緑の揺るる中なる父母の声 府中 山本 徳子
 夕立止み浴衣清清し神楽坂 多摩 山本みつし
 目に痛き日差しの強さ梅雨明け 調布 豊 宣光
 卯の花に雨意あり靴のひも結ぶ 稲城 好井 由江
 青葉光ホルンのような朝が来た 三鷹 吉川 真実
 薔薇剪つて余命五年とは忙しい 東久留米 吉平たもつ
 蜘蛛は今朝すこし手抜きを張りぬ 国立 立 吉村春風子
 ソーダ水なるやうにしかならぬ 町田 米倉 信山
 愛子さまのお手振る笑顔風薫る 立川 米澤 久子
 虐めるなとばかりの顔の皮剥く 小平 我妻 民雄
 みんなの声が本降り大櫻 青梅 梅渡部 洋一

足立喜美子

透明な息して涅槃図を見たり

大石 雄鬼

今迄、涅槃図を拝観する機会が何度かあった。特に金剛峯寺の画像が印象に残っている。「透明な息して」の詩的な表現に思わず唸ってしまった。寺院静謐の清澄な空気の中、じつと涅槃図と向き合っておられる作者が彷彿とする。

穴原 達治

柳絮とぶ落つるはどこも敵地なり

渡部 洋一

柳絮は柳の種。絮に囲まれて風に飛ばされ落ちたところが生涯の始まりである。生きるということはまさに敵地に於いての戦いが始まることである。思えば人間も生物。まさに生きるという戦いの中にいる訳ではないか。平和に慣れ過ぎる反省も必要かも。

有原 雅香

一つ覚え二つ忘れてペンペン草

城内 明子

全く他人事ではありません。近頃友人と会うと出る話題が物忘れの話。忘れる事は時には幸せと思う事もあるが、やはり落ち込む事が多い。掲句は率直な表現ながら、ペンペン草の季語に、軽い戯けと苦笑が見え隠れして共感の持てる御句。

飯田 玉記

のどけしや小さな窓が丁度いい

前田 光枝

私のベッドの脇が小さい出窓で、小さい目覚し時計を置いている。夏にはここからの風が涼しく私にも丁度いい小窓。丁度ほどよいと言うこと。作者の謙虚さ、優しさ、あたたかさをこの句から感じる。何事も丁度いい日々が過ごせたらとても幸せ。

一ノ瀬順子

八十年戦死なき国福寿草

江中 真弓

戦後八十年の我が国、戦争の年に生まれた私。亡夫の父も先の大戦で、若き兵として戦死している。戦死なき世の有難さを痛感する。「福寿草」は、家族の様にひとかたまりになって咲く黄色い花。幸せの象徴の様で実に効果的である。

一関なつみ

雪女英語露西亜語修得す

田村 明通

アニメ版「ゲゲゲの鬼太郎」ではないが、季語の「雪女」も時に現代みを帯びたり原点回歸したりする面白さがある。北海道や東北などインバウンド効果で雪国を訪れる外国人は多い。雪女が英語やロシア語を独りに修得していいような器量が想像される。

伊東 類

春めくや起伏ほどよきオムライス

島 彩可

ご自宅なのでしょう。オムライスが食卓を飾っています。冬の鍋料理に変わって、食事の風景もゆつたりしてきました。ふわふわの卵に包まったトマトケチャップたっぷりのオムライス。「ほどよき」に心待ちした春の団欒の姿が醸成されています。

大井 恒行

わだつみにロザリオ散りし二月尽

齋木 和俊

「わだつみ」は海の神。「ロザリオ散りし」はカトリック教会で用いられる数珠状のものが碎かれることだろう。日本列島の年月は、むしろ神なき三月だったというのに。『二月尽』で春の訪れを示唆している。神なき神に祈るとはこのことかも知れない。

大槻 正茂

うららかや顔認証に背伸びして

米澤 久子

病院かな？すぐに反応、認証してくれればいいのにどうもうまくいきません。もうすこし上向いてとか、受付の人に言われてしまします。とうとう背伸びすることになりました。顔つきまで想像できます。「うららかや」でユーモラスに仕りました。

大森 敦夫

バス停の列のゆるみや春深し

小川 紅子

バス停に並ぶ人々の列を、ゆるむと表現したところが面白い。それぞれがスマートフォンを片手にバスを待っている光景であるうか。画面に集中し周囲に注意が向かないと列もゆるみがち。夏日の気怠い晩春。遅れたバスがゆるゆる坂を上って来る。

小川 葉子

トランプにジョーカーいない四月馬鹿

今田 述

手の内のトランプを見ながら「ジョーカーなんてものはいないのさ」と囁く。「四月馬鹿」にニヤリとしながら。四月八日、作者は彼岸へ旅立った。八日は虚子忌、仏生会である。ジョーカーがあれば、此岸に留まれたであろうに。悟りの句である。

尾崎 太郎

葦芽ぐむ湧水へ鷺一歩づつ

西川 五月

近くに小さな谷戸があり、幾つかの池があります。池は草に囲まれ、その蔭に時々鷺が隠れるように立っており、やがてゆつくりと池の中を歩いていきます。見ていると静かな時が流れていきます。この句にも同じ静かな時の流れを感じます。

尾関 英正

自転車に自転車もたれいる春夜

好井 由江

巧みな一句ですね。春夜には艶かしいイメージがありますが、ここでは何処でも目にする自転車の寄り掛かっている様子を淡々と詠み、春夜に繋げる。自転車が生き物であるかのような錯覚に陥ります。季節が効いており、独自の発想に感服しました。

小野こうふう

春めくや起伏ほどよきオムライス

島 彩可

グルメ番組は多いが俳句ではあまりお目に掛かれない。グルメと詩の両立は難しいのか、と思ったが美味しそうな俳句に出会えた。このオムライスは卵ドロップではなく薄焼き卵。花菜風の吹く春の丘、添えられたパセリはやがて新緑となるのだろうか。

片倉みちこ

ははハナ吾を彼岸に産み逝けり

玉木 祐

母の名は「ハナ」、私を産んで程なく逝つてしまった、と読んだ。母への強烈な思慕を感じた。恐らく、若くして亡くなられ、共に過ごした時間が短いほどその思いは増すのではないだろうか。彼岸が来ると必ず思い出される。真実は強くて重い。

神崎 幸子

春や春長女もうすぐおばあちゃん

西前 千恵

明るい季節の春と曾孫の誕生を待ち望む気持ち重なり、娘さんとお孫さんへの思いが強く感じられます。母親としての経験豊富なやさしい思いやりが伝わってきます。私にも曾孫が一人おりますが可愛さは限りありません。おめでとうございます。

城内 明子

春めくや起伏ほどよきオムライス

島 彩可

「起伏ほどよき」の措辞に、ふわとろ半熟卵の温かなオムライスが見えます。「春めく」の季節の巧みな把握。又この様なふとした場面に小さな仕合わせ、否、確と自分が今在る実感、充分な仕合わせの瞬間をも作者は感じ取っているのでしょうか。

小泉満知子

早春の農夫一人の大地かな

松井 彰子

農家の方が広い大地に作物の種を蒔いているのでしょうか。静けさの中に、春のいぶきを感じます。

高坂 栄子

畳屋が来て正月を置いてゆく

藤原はる美

子供の頃、暮になると畳屋さんが来て、張り替えしたばかりの真新しい蘭草の匂いを思いだしました。畳のない生活をしている今、あの頃が懐かしいです。「正月を置いてゆく」まさに実感で楽しい一句です。

佐々木克子

実印を捺すごと歩く雪の道

三浦 文子

雪国に生まれ育った私にとっては領けることでした。気をゆるめることなくしつかり歩かないと大変です。それにしても「実印を捺すごと」とはよい比喩ですね。共鳴した好きな句でした。でもゆっくり又歩きたいな。

佐藤 光子

花種を蒔いて何やら使命感

平山 道子

私の家の庭に幾種類もの紫陽花がある。一昨年の五月、一斉に見事な濃紫で大きくも揃い紫一色で咲き続け異様だった。案の定夫は自覚症状も無いまま、末期癌で六月に亡くなった。もの言わぬ花も、蒔いた人の気持ちに呼応する。氣遣つて育てる事だ。

坂本 空

花粉症宙ぶらりんの自尊心

稲吉 豊

中下に納得。花粉症で本来の力が発揮できない様子に「宙ぶらりん」がなんとも言いえて妙。その措辞が単なる花粉症の説明に終わらず、まるで自尊心が体のなかで孤独にブランコに座っているような映像を詩的に浮かびあがらせている。

櫻 さとみ

長居してカフェオレ冷める浅き春

三池しみず

今は亡き親友と、まさにこのような良き日を過ごしたことを思い出します。カフェオレは大きな陶器のボウルにたつぷり。早春の空気まで伝わってきて余韻が残ります。一杯のカフェオレが人生と時間とを包み込んでいます。

島 彩可

実印を捺すごと歩く雪の道

三浦 文子

実印を捺すごとと雪の道を歩くことは離れているがどちらも緊張感が伴い慎重にならざるをえない。加えて思い切りの良さも大切だ。真っ白な雪にくっきりと残る力強い靴跡が彷彿、思いもかけない取り合わせの妙に思わず膝を打った。

清水 弘一

終末時計ゼロになる日も耕せる

安達 昌代

地球・人類の終焉までも耕す。短詩の決意表明に人間かくあるべしと思います。この様な句との出会いがあるから俳句人生は楽しく素晴らしい。地球人、そして宇宙人全てに送るエールであり、人間賛歌です。

鈴木かずえ

未来へと己れを遺す初句会

川島 一夫

真実は永遠に遺ると云う。縦横無尽に物事をとらえた表現がきつと人々の心に深く触れてゆくことでしよう。俳句をたしなむ者として祈りにも似た気概を学ばせて頂きました。これからは精進して自分自身の感性を磨いて行きたいと思います。

鈴木 佑子

一つ覚え二つ忘れてペンペン草

城内 明子

句意は平明。季語の「ペンペン草」はどこでもあるなじみの雑草。物忘れするのには年老いた者には日常茶飯事のこと。誰でもある程度の年になると体験する。なじみのことを「一つ覚え二つ忘れて」と数え唄のような調子のよさに微笑笑する。

関 梓

八十年戦死なき国福寿草

江中 真弓

昭和二十年を境に私たちの国は、戦争をしていない。戦火に怯える事もなく、新年を迎えた。正月飾りの福寿草は健気に輝いている。これ以上の幸せはあるのだろうか、しかし今なお地球上に絶えない戦火があり、この先は宇宙の新しい星に侵攻するののか。

高瀬多佳子

種物や やさしい父の下手な文字

水落 清子

草花、野菜、穀物等の種子を表す「種物」という季語に何とも言えない暖かさとうれしさを感じる。この父の庭には草花の名前の札が下手な文字で書かれているのだから。作者と父親との優しい関係が「下手な文字」からしみじみと伝わってくる秀句。

高原 桐

若葉して大きな雨の木になりぬ

幸田 晋

寒暖差大にして季節が不明瞭ながら、昨日今日と春の雨が降っている。木々が芽吹いたかと思うとあつという間に枝が伸びて、隣の木々と重なり合う。雨が降ると一層伸びてくる。「大きな雨の木」の表現が美しく、生命力にあふれて素敵である。

谷村 鯛夢

炒めたる大根の葉の旨さかな

永井 潮

確かにこれは旨い。ただ、それが流れてきた葉でね、というと面白がりすぎだが、いずれにせよ、向こうに例の句が見える。こういうのも「本歌取り」でしょうかね、潮さん。私も「咲き満ちて虚子忌の花のありにけり」などとやってみましたけれど。

田村 明通

木の根明く夜には星の匂いせる

大井 恒行

旭川赴任当時、春に木の周りの雪が溶けて土の輪が広がって行く。木の生命力に感動した。木の根明くという季語があるのだ。そして人の入らぬ森に満天の星が現れる。まさに生命と宇宙への賛歌だ。ただ、人類の持ち時間はすでに秒読みだ。

玉木 祐

木の根明く一人芝居に草臥れて

前田 弘

雪国の林、木は幹の周りにツリーホールができる。人生を頑張って演じてきたが、やつぱり本音は疲れた、そろそろ歳か？諦念を悟るこの頃。だが未だ負けられない、もう一踏ん張りを感じられる。その葛藤が伝わってくる。さりとて詠って内容が濃い。

根岸 敏三

鶯の声数へつつ谷戸の道

尾崎 太郎

谷戸の道に鶯の声を何度か聞いた作者。「数へつつ」で耳を傾けて歩く様子が目に浮かびます。谷戸の緑の中でほっとしている気持ちや伝わってきました。私も五日市での鱒釣りで聞いた鶯に、俳句をしている人間としては嬉しい限りでした。

根岸 操

さみしくなつてたんぼの絮とばす

佐々木克子

冬が去りたんぼが咲くと、心が弾んでくる。桜が葉桜になる頃、ふと見るとまん丸の絮になつているたんぼ。私も手折って絮を飛ばしてみた。「なんだ、遠くには飛ばないのね」。克子さんといつか絮の飛ばしっこをしてみたい。

平井 葵

畳屋が来て正月を置いてゆく

藤原はる美

「正月を置いてゆく」の巧みで粋な表現に惹かれた。正月を迎える為に十一月は障子の貼り替え、十二月は畳替えが常であった。庭先での畳替えの作業を飽きずに眺めた記憶が一気に甦った。今年は昭和百年である。懐かしさと共に心に残る句である。

前田 光枝
自転車に自転車もたれいる春夜

好井 由江

自転車置き場でたまに見かける光景である。一読して笑ってしまった。一台を動かした途端ドミノのように倒れていく。何とも泣きたくなる。それも家路に急いでいるのである。夜空には今日に限って幾つかの星が輝いている。少し汗ばんできた。

三浦 長閑

統合で校歌消えけり春時雨

大森 敦夫

高齢化、少子化に加えて教師不足の昨今学校の統廃合はやむをえない状況。親しんだあの校歌が無くなってしまう寂しさの中、「春時雨」の幹旋が一筋の光明を添えた。上五、中七の表現にもう一工夫があれば最高!と思う。

三木 冬子

ランチのセロリシャキシャキ春を囃む

鈴木 佑子

ランチは昼食を兼ねた遅い朝食。最近、気候変動による寒暖差もあり、ゆったりした気分の春が余り感じられないが、ランチにセロリは気持を上向きにしてくれる。シャキシャキのリズムで春を軽快に、「春を囃む」が大らかに且つ句を引締める。

水落 清子

海苔あぶる母の手ひらり晴天です

小林 育子

一読して、まず海苔の香りがして暫く目を閉じた。中七で手際よく動くお母さんの手の様子が気持ち良い。晴天の日の始まり。おむすびを作るのかしら?御家族でお出かけですね。日常のちよつとした事に心を向けて詠む。惹かれた御句でした。

満田 光生

木の根明く夜には星の匂いせる

大井 恒行

雪深い早春の森、木の根元の雪がドーナツ型に溶ける。木が活動を始めたからだ。裸木の上に瞬く星にも匂いが……。本当は星に匂いはない。木の生命力が「匂い」、それが星にも乗り移ったかのよう。天地の春の息吹を大きなスケールで詠んだ句だ。

宮腰 秀子

雪催いスマホに仕舞う時刻表

新井 温子

JRを常にご利用している。時間が変わったので新しい時刻表を貰いに駅に行ったら「今は発行していません、スマホで見られる。」と言われた。二年程前のこと。今もスマホを使わない老齢の私はこの句に納得。作者の若さが羨ましい。雪催の季語が絶妙。

守谷 茂泰

若葉して大きな雨の木になりぬ

幸田 晋

つい先日によく芽吹いたと思っていた木が、季節が進む中で、ひと雨ごとにその葉をいつの間にか大きく成長させているのを見て、驚くことがある。「大きな雨の木になりぬ」に、作者の受けた木の生命力の実感がこもっている。

山本みつし

湯疲れに気づく齢や春の宿

石原 俊彦

湯上りに、宿の藤椅子に身を委ね、いつしか心地良い湯疲れと相俟って、至福の一時を貪るとは何と羨ましい一時でしょう。湯疲れに気づかれる得がたい句境は、退職時の私の家族旅行と重なり、感慨深いものがありました。

豊 宣光

戦来て春なのに春来ない国

成戸 寿彦

寒く閉鎖的な冬が終わって、春は暖かい希望と夢が開く季節です。それなのに、戦争のおかげで生活が破壊され、春という季節を楽しむことができない。今地球には戦争状態の国がたくさんあります。その現状を憂うる作者の気持ちが感じられます。

吉川 真実

生きている証のひとつ春の風邪

望月 哲土

春先は風邪をひきやすい。普段と違う鼻喉の不調は不快で気分も沈みがちになる。だが、作者はここで「こうやって風邪をひくのも自分が生きているっていう証拠さ。」と視点を転換している。「春の風邪。」と「生の証」と前向きに捉えた着眼点が秀逸。

米倉 信山

春という時計を軽く腕に巻く

大西 恵

春は新しい始まり、希望を感じさせます。その新しい始まりを時計に喩えて詠ったことに感服しました。中七から下五の「軽く腕に巻く」が、より春らしさを感じさせます。作者と同じように春を腕に巻いて、外に飛び出したくなりますね

原稿の送り先

「あけぼの集」葉書の送り先と「一句鑑賞」原稿の送り先は共に青木隆さんです。

句や原稿はメールでもお受けします。アドレスは

tamanakebono@googlegroups.com

あけぼの便り

○一歳児の育児であわあわ過ごしております。年内中に俳句研究会に参加してみたいです。

（一関なつみ）

○「陸」中村和弘主宰の4賞受賞と『漢俳』の今田述氏の逝去は晴と曇ほどの衝撃を受けました。

（小川葉子）

○5月3日、石橋いろりさんの企画で、国分寺公園、お鷹の道、武蔵国分寺跡、国分尼寺跡を歩きました。天気にも恵まれて素晴らしい吟行になりました。久しぶりに長いコースを歩いた方も、勿論ショートカットされた方もいたと思いますが、それぞれ十分に堪能されたことと思います。

句会場の都立多摩図書館も広くて気持ちの良い会議場で結構でした。吟行句がスカッとリアルに出来れば文句のない小生ではありますが。（亀津ひのと）

○川島一夫様、松元峯子様、前号にて拙句ご講評下さり、有難うございました。嬉しく面映ゆく拝読致しました。感性も益々乏しく思考回路にも何も無い次第ですが何とか続けられたらと思っております。

（城内明子）

○飛永百合子様、一句鑑賞にとり上げて頂

き、ありがとうございます。母との話はずみしました。母娘で俳句づくりもたのしみです。

（小泉満知子）

○渡部洋一様、拙句を採りあげて頂きありがとうございます。日常の何気ない事を詠みましたので深い鑑賞文に身に余る思いです。

（高坂栄子）

○秋尾敏先生の講演内容を掲載していただきありがとうございます。とてもわかりやすく勉強になりました。

（小林マリ子）

○これ以上暑くならないことを祈って老いの身をいたわりつつもう少しがんばれるかなと……

（佐々木克子）

○笹木弘様、一句鑑賞に拙句をお取り上げ頂き有難うございました。（鈴木かずえ）

○今月号では自分だけの能面の世界を考えていたのに、とり上げて下さる方があり、同感を得てうれしい限りでした。当地ではまだ燕を見ておりません。白いレースのような外来種らしい花が見事で毎日、瓶に入れて楽しんでいきます。ミナガヒナゲシも姫しおんも飾って、今年はことに美しいです。

（高原桐）

○会報No.154の秋尾敏さんの講演を直にお聞きしましたが、再読して大変有難かったです。

（寺島美美子）

○新しい会員の方々も増えて皆様にお会いしたいのですがなかなか出かけられません。あけぼの集を楽しみにしております。
(飛永百合子)

○大西恵様、藤原はる美様、拙句の鑑賞文を頂き有難うございました。冤罪は償い切れるものではありませんね。先日新聞で、東京都の小学校校長異動記事に、大田区東糎谷小・校長小泉満知子とありました。満知子さんご栄転おめでとうございます。俳句も本誌から始められたと伺っています。益々ご精進を。(永井潮)

○老老介護中です。生命ある者、いつかは死ぬのですが、それまでの一日一日の重さを感じずにはいられません!! 実は昨年九月、夫がコロナに罹りまして気管切開しますか、自然死を選びますか、と言う処まで行きましたが生存しました。但し一歩も歩けません!! (中田とも子)

○原稿の依頼ありましたが腰椎圧迫骨折し、月末に検査です。時間がとれないので先送りにして下さい。(長野保代)

○秋尾敏氏の「碧梧桐と虚子」改めて読みました。ポイントが碧梧桐の今に続く流れということですね。(野口佐稔)

○編集部の皆様のお骨折りに感謝申し上げます。俳句を生き甲斐にしております。

(萩原美沙)
○荒川勢津子様。句評をありがとうございます。鈴木石夫教室にて御一緒に勉強した事を懐しく思い出しました。とても楽しかったですね。
(松元峯子)

○過日、多摩地区の総会と句会の折、永年会員四名の作品を展示、三名の方がお話があった由、私、欠席申し訳ありませんでした。拙句「ほんやりは哲学うちの車輪梅」を賞状の大きさにプリント、お送り下さり心より感謝しています。石橋いりり様にお手間をかけました。ありがとうございます。
(三木冬子)

○近くの公園を散歩することが何よりの楽しみです。日々変化する自然に感動しつつ改めて俳句に出会えて良かった。皆様無理をせずに夏を乗り切りましょう。
(水落清子)

○昨秋の多摩地区俳句大会で講演された秋尾敏先生の近著『子規に至る 十九世紀 俳句史再考』(新曜社)から、大いに刺激を受けています。江戸俳諧と近代俳句は断絶したものではなく、連続性の中で近代俳句誕生のドラマが見えてきます。「俳句の常識」を盲信せず、俳句表現の可能性に挑戦していきたいものです。
(満田光生)

○ガザの惨状。何も出来ぬ国際社会。国連本部ビルの米国ニューヨークからの移転もあり得る事態に!!
(武藤幹)

○薛く前は袋の写真を眺めこんなに見事に咲くものかと半信半疑。でも蒔き終えたあとは疑念は薄れ、花に対する期待と愛情はすでに心に芽生えている。自然への使命感は日々の生活に活力を与えてくれる。水やりが楽しみ。
(森本由美子)

○今日は。「多摩のあけぼの」を毎号楽しみに見させていたきとても勉強になっています。諸先輩方の俳句にはいつも啓発されています。
(米倉信山)

○満田光生様へ。満田さんの郷里は会津とのこと、私も会津出身です。父が市内行仁町、母が会津本郷です。こんな近くに会津出の方がいるとはなつかしいです。私の小さい時と変わってすっかり様変わりしていることでしょう。豪雪のことも覚えています。ここ数年は会津へは帰っていません。
(渡部洋一)

○3月1日の総会をもちまして副会長を退任いたしました。何もできないのに長い間お世話になりました。これからは一会員として会の催しには極力参加したいと思っています。今後共よろしくお願ひいたします。
(戸川晟)

武蔵国分寺・国分尼寺吟行会

令和7年5月3日、憲法記念日。前日の荒天が嘘のような快晴の空の下、JR西国分寺駅に20名が集まり、吟行会が催されました。体力・体調に応じた3コースの設定に幹事さんの心配りを感じました。参加者は国分寺公園、お鷹の道、国分寺史跡、国分尼寺跡をバスまたは徒歩で訪れ、それぞれの場所で俳句を詠みました。

お鷹の道では、湧水の音を聞きながら、道端の草花や古民家の風情が、参加者の創作意欲をかき立てました。

国分寺史跡では、古の時代に思いを馳せ、歴史の重みを感じながら俳句を詠みました。遺跡の静けさと荘厳さが、心に深い印象を残しました。

国分尼寺跡では、静寂な環境の中で、参加者は各々の心の内を詠みました。尼寺の穏やかな雰囲気、深い詠みを生み出しました。

最後に、東京都立多摩図書館で句会が開かれました。参加者はそれぞれの吟行地で詠んだ俳句を持ち寄り、互いに鑑賞し合いました。豊かな自然と歴史に触れ

た一日を通して、詠まれた俳句はどれも個性豊かで、心に響くものばかりでした。表彰は上位7人。「おおかみを龍神と呼ぶ山の民 兜太」のトートバッグなどの素敵な賞品が渡されました。

この吟行会は、参加者にとって忘れられない貴重な体験となり、自然と歴史を肌で感じる中で、俳句の魅力を再確認する良い機会となりました。

アフターは生ビールで喉をうるおし楽しい一日を締めくくりました。

(田村 明通)



吟行会のバスにて

初夏の吟行会作品

〈入賞七句〉

尼寺跡にサッカー少年犬ふぐり 根岸 操
天平の礎石に座り春惜しむ 尾崎 太郎
ぶらぶら抜ける天平の五月へと 広井 和之
若楓往時の堂宇眼裏に 水野 星閣
住む人に蛩を問うてお鷹道 田村 明通
湧水の病葉うかべ夏きざす 戸川 晟
新緑やいざ鎌倉へ上道 関 梓

〈二人一句〉

国分寺跡に埋もれてぬし羽蟻 大石 雄鬼
みどり風に背を押されて国分尼寺 石原 俊彦
国分寺跡の虚空を夏巨木 亀津ひのと
夏草のなき参道の赤き道 根岸 敏三
五月空みつたみつおをみつけた 三浦 長閑
七重の塔の礎石に夏落葉 青木 隆
尼寺跡やうつむくやうに踞蹠散る 秋山ふみ子
風薫る伽藍に読経響きけり 満田 光生
知る知らぬ幟の夏を池の鯉 櫻 さとみ
尼寺跡や朝明けむ春の虹 大森 敦夫
薄暑光あまねく武蔵国分尼寺へ 石橋いろり
国分尼寺墓壇の脇に蒲公英あり 玉木 康博
路の葉の小さき傘の我笑ふ 小川 紅子

令和七年度 定時総会・陽春句会

令和七年三月一日(土)

於・東村山市サンバルネ

コンベンションホール

仲春とは言え、風の冷たい一日、令和七年度定時総会と陽春句会が開催された。全員で会歌「多摩のあけぼの」を斉唱後、満田光生幹事の司会により、根岸敏三副会長の開会の言葉で会は始められた。

水野星閣会長の挨拶に続き、石橋いろいろ事業部長から、現代俳句協会の永年会員として、小山健介、辻升人、三木冬子、水落清子の各氏が表彰されたことが紹介され、出席の各受賞者より挨拶があった。

定時総会

議長に石原俊彦氏、副議長に尾崎太郎氏を選出し議事に入った。

第1号議案 二〇二四年度事業報告

第2号議案 二〇二四年度収支報告及び

会計監査報告

第3号議案 二〇二五年度事業計画案

第4号議案 二〇二五年度収支予算案

第5号議案 一部役員の異動及び新規選

任の件

事業の第1号議案及び第3号議案については石橋いろいろ事業部長から、予算の第2号議案及び第4号議案については根岸操経理部長から、第5号議案については水野星閣会長からそれぞれ説明された。

以上右の議案が審議され、原案のとおり承認、可決された。

陽春句会

投句数50句、当日の出席者は30名と昨年を下回った。

上位入賞者7名と特別選者の特選句は18頁の通り。上位入賞の方々には当協会からの賞品が、特選句の方々には特選選者の特選賞が、それぞれ授与された。

来年度は投句者・出席者ともに増え、盛況となることを願っている。

(小山健介)



水野会会長挨拶



司会の満田さん



石原議長(右)と尾崎副議長



全員写真

2024年度（令和6年度）
収支決算報告書

1. 収支状況（令和6年1月1日～令和6年12月31日）

		前年度実績	予 算	実 績
収入	本部助成金	360,200	360,000	300,200
	地区会費	84,000	100,000	96,000
	事業収入	557,520	845,000	641,000
	雑収入・寄付	344	1,000	20,102
	計	1,002,064	1,306,000	1,057,302
支出	事務費	21,571	20,000	14,512
	通信費	16,830	20,000	6,237
	印刷費	23,650	30,000	0
	会報費	517,533	520,000	500,239
	会場費	0	5,000	0
	交通補助費	21,500	30,000	19,000
	交際費	2,804	5,000	5,760
	事業費	526,255	535,000	436,205
	会議費	7,360	10,000	27,326
	雑費	2,910	4,000	1,740
	計	1,140,413	1,179,000	1,011,019
	(*)収支差額	△ 138,349	127,000	46,283

(*) 前期末資金残416,234円（下記2.）に、当期収支差額実績（46,283円）を加えたものが、当期末資金残462,517円である。

（備考）当期事業費の収支状況

事業項目	収 入	支 出	収 支
総 会	69,000	59,636	9,364
俳句大会	294,000	329,058	△ 35,058
吟行会	33,000	30,590	2,410
研究会	245,000	16,921	228,079
協会賞	0	0	0
計	641,000	436,205	204,795

2. 資金状況

現金預金内訳	前期末	当期末	増 減
手元現金残高	28,764	0	△ 28,764
普通預金残高	387,470	462,517	75,047
定期預金残高	0	0	0
合 計	416,234	462,517	46,283

総会資料の概要

2025年 俳句研究会及び行事案内

◆俳句研究会	開催地
第1回 令和7年 1月11日（土）	立川（子）
第2回 2月8日（土）幹事会	武蔵野（か）
第3回 3月29日（土）	立川（子）
第4回 4月26日（土）幹事会	立川（子）
第5回 5月24日（土）	立川（子）
第6回 6月28日（土）	立川（子）
第7回 7月26日（土）	立川（子）
第8回 8月23日（土）	立川（子）
第9回 9月27日（土）幹事会	立川（子）
第10回 10月25日（土）	立川（子）
第11回 11月29日（土）	立川（子）
第12回 12月20日（土）幹事会	立川（子）

午後1時より句会、合評。句会に先立つ講話は3ヶ月に1回程度実施。開催地の（子）は立川市子ども未来センター、（か）は武蔵野市かたらいの道市民スペース。

◆主な行事	
2025年度 定時総会・陽春句会 3月1日（土） 会場 サンパルネ	東村山市
初夏の吟行会 5月3日（土・祝）武蔵国分寺・国分尼寺跡 句会場 都立多摩図書館	国分寺市
第43回多摩地区俳句大会 10月13日（月・祝） 会場 立川市子ども未来センター	立川市
秋の吟行会 11月1日（土）府中市郷土の森博物館 句会場 未定	府中市
◆会報「多摩のあけぼの」編集発行	
令和7年（1月 4月 7月 10月） 各月の25～31日頃発送予定	

二〇二五（令和七）年度
一部役員の異動及び新規選任

辞任
副会長・事業部
戸川 晟
山本ひまわり

新任
事業部
山本ひまわり

経理部
小川 紅子

事業部
広井 和之

広報部
櫻 さとみ

※新任の方々の任期は、他の役員と同様、二〇二七（令和九）年度の定時総会終結の時点までの二年間とします。

令和七年度 陽春句会作品

〈入賞七句〉

はき慣れし靴に貌あり春日向 宮腰 秀子
 言訳も愚痴も受け入れ蜜柑むく 鈴木 浮葉
 別姓で呼びあふ夫婦花の下 蓮見 徳郎
 気がつけば本屋のない町五郎助ほう 石橋いろり
 A Iに汚染されずに辛夷咲く 森本由美子
 初みくじ小さな幸を噛みしめる 松元 峯子
 新聞の引用長き初日記 小山 健介

〈以下到着順〉

わびさびを深むる妻よ梅ふふむ 三浦 長閑
 灰色の政治誰かが死んだ聖夜 三池 泉
 外にも出よヒメサクラソウ咲いたから 水落 清子
 点鬼簿に我が名未だ無し晦日蕎麦 望月 哲土
 人形の瞳に映る春灯 佐々木克子
 バロックの五臓に沁みて春隣 櫻 さとみ
 古日記断捨離でさぬ齢人 関 梓
 日永し女性の一生は更に 永井 潮
 B面に多摩湖小唄や春日美し 大森 敦夫
 あどけなく綿虫あそぶ夕べかな 秋山ふみ子
 西萩をゆけば小川が春浅く 西村 智治
 梅咲いて卑弥呼くると笑みこぼす 安西 篤
 柿の木に烏の花咲く冬の暮 鈴木 寿江

塩ジャケはかなしからずや初がすみ 遠山 陽子
 思い出は人生そのものの返り花 飯田 玉記
 冬来れば冬ソナ想いふんわりと 村井 一枝
 ひとり言を言いつ抜け出す春寢床 石原 俊彦
 竜の玉遺影の笑みはとこしなへ 稲吉 豊
 冬至の湯子にうつすりの髭を見き 水野 星閣
 春障子保育園児の声響く 根岸 敏三
 春や春長女ももうすぐおばあちゃん 西前 千恵
 新緑に力授かる杖の人 長野 保代
 朝餉前湯気立つ温浴芹が待つ 玉木 康博
 一途なる棘のくれなる冬薔薇 平井 葵
 寒昂生死を選ぶ宣告に 中田とも子
 蛇出でて世に警鐘を鳴らしたり 根岸 操
 下萌の声はわが胸わが耳に 有坂 花野
 裸木のかすかな息吹日脚伸ぶ 尾崎 太郎
 戦後生れに数の子のざらつきぬ 広井 和之
 新春放鷹敵は多勢の棕鳥と鳩 亀津ひのとり
 背伸びしてゆくも寒なり遅遅と 川島 一夫
 大天井岳へ冬敵バツハの変奏曲 満田 光生
 凍空を衝く甲斐駒ヶ岳の神の剣 青木 隆
 菜の花に吾子重ねしは強き背な 小川 紅子
 国憂ひ人を憂ひて春を待つ 沼田 博古
 探梅やしづくのやうに人が来る 大石 雄鬼
 上も下も痛そうな三日月 蓮見 順子
 愛ちゃんの花嫁衣裳春を待つ 戸川 晟
 風呂洗う俺流妻流春の風 野口 佐稔



陽春句会2位の鈴木浮葉さんと水野会長



陽春句会1位の宮腰秀子さんと水野会長

子を生かし生かされていて冬落暉 一関なつみ
 海荒れて能登は入りゆく寒土用 大井 恒行
 誰何され不意に頷く龍の玉 前田 弘
 冬青草はじめの一步のよそよし 前田 光枝

〈句会選者の特選句〉

安西 篤 選

気がつけば本屋のない町五郎助ほう 石橋いろり

前田 弘 選

はき慣れし靴に貌あり春日向 宮腰 秀子

吉村春風子 選

冬至の湯子にうつすりの髭を見き 水野 星闇

遠山 陽子 選

気がつけば本屋のない町五郎助ほう 石橋いろり

三池 泉 選

はき慣れし靴に貌あり春日向 宮腰 秀子

三浦 長閑 選

凍空を衝く甲斐駒ヶ岳の神の剣 青木 隆

江中 真弓 選

AIに汚染されずに辛夷咲く 森本由美子

津久井紀代 選

風呂洗う俺流妻流春の風 野口 佐稔

大井 恒行 選

大天井岳へ冬敵バツハの変奏曲^{おてんじょ ふゆひ パリエーション} 満田 光生

石川 春鬼 選

ひとり言を言いつ抜け出す春寝床 石原 俊彦

宮崎 斗士 選

はき慣れし靴に貌あり春日向 宮腰 秀子

赤野 四羽 選

戦後生れに数の子のざらつきぬ 広井 和之

水野 星闇 選

新春放鷹敵は多勢の掠鳥と鳩 亀津ひのとり

根岸 敏三 選

探梅やしづくのやうに人が来る 大石 雄鬼

永井 潮 選

海荒れて能登は入りゆく寒土用 大井 恒行

山崎せつ子 選

裸木のかすかな息吹日脚伸ぶ 尾崎 太郎

戸川 晟 選

春や春長女もうすぐおばあちゃん 西前 千恵

石橋いろり 選

AIに汚染されずに辛夷咲く 森本由美子

小山 健介 選

梅咲いて卑弥呼くすりときこぼす 安西 篤

根岸 操 選

はき慣れし靴に貌あり春日向 宮腰 秀子

蓮見 徳郎 選

柿の木に烏の花咲く冬の暮 鈴木 寿江

大森 敦夫 選

わびさびを深むる妻よ梅ふふむ 三浦 長閑

佐々木克子 選

探梅やしづくのやうに人が来る 大石 雄鬼

大石 雄鬼 選

戦後生れに数の子のざらつきぬ 広井 和之

現代俳句協会から永年会員として当地区の次の方々が表彰されました。

40年永年会員作品

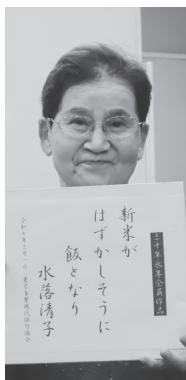
才能という名の病 蝗草 小山 健介

30年永年会員作品

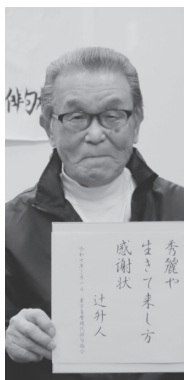
秋麗や生きて来し方感謝状 辻 升人

加齢は華麗なり立葵 三木 冬子

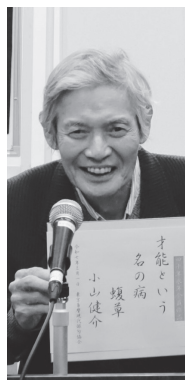
新米がはずかしそうに飯となり 水落 清子



水落清子さん



辻 升人さん



小山健介さん

第2回俳句研究会

2月8日(土) 武蔵野市かたらいの道市民スペース
担当幹事 根岸操・玉木康博・石橋いろり

大森敦夫・尾崎太郎・青木隆
参加者22名

★講話なし

早春の農夫一人の大地かな 松井 彰子
何かしら切りつめてます凍み豆腐 石橋いろり
うすらひや漬け樽の葉の尽くる頃 淵田 芥門
ニユータウンとふおいし町寒夕焼 尾崎 太郎
声ありし昭和のく鬼やらい 石原 俊彦
紅い灯は昭和の形見ばたん雪 稲吉 豊
月齢二寒夕焼を斬るごとし 水野 星閣
恵方巻郷の荒磯の香りして 三浦 長閑
留守番を雛にまかせて出勤す 根岸 敏三
海苔舟や素描を終へて握飯 大森 敦夫
出来たのに出来ない不安春の闇 飯田 玉記
鬼は外先頭走る異邦人 戸川 晟
胡蝶蘭天下りして化粧室 小川 紅子
山眠る繁殖はじめの麴菌 森本由美子
値上りの助けとなるか路の臺 西前 千恵
日向ぼこ母の齢に近づきぬ 佐々木克子
紅梅や少し離れて香りくる 根岸 操
三面鏡美肌を競う雪女 櫻 さとみ
ユキヤナギ二つ三つの探白かな 玉木 康博
オスプレイの羽音に揺るる薄氷 青木 隆

立春のあと豪雪の蜻蛉洲 亀津ひのとり
寒明忌革新の道三千里 齋木 和俊

第3回俳句研究会

3月29日(土) 立川市子ども未来センター
担当幹事 満田光生・秋山ふみ子・

小山健介・石原俊彦・根岸操・
亀津ひのとり・尾崎太郎
参加者25名

★講話なし

やはかく言葉を交はす彼岸かな 秋山ふみ子
土筆摘むひかりの束を摘むごとく 亀津ひのとり
桃咲いて今も村には上と下 水落 清子
ヘルメット四隅に置いて花筵 根岸 操
のれんから首出すをんな名残雪 稲吉 豊
種袋振つて異国の風の音 田村 明通
芽柳や寝息の満ちる乳児院 小山 健介
あしたねと約すがごとく梅ふふむ 松井 彰子
鳥曇むかし刑場ありし町 尾崎 太郎
抜く襟のあはせ鏡に花あかり 淵田 芥門
佐保姫の行つたり来たりじれつたい 松元 峯子
もぐら塚春の野原をほつれさす 根岸 敏三
軽くなる春の三日月靴磨 大森 敦夫
先見えぬ八十路どこまで遠霞 石原 俊彦
再婚を祝う八十八夜かな 飯田 玉記
鷹鳩と化して滝合駐在所 満田 光生

はけの道破調の鶯けふも鳴く 三浦 長閑
売り切れの桜餅居並ぶ鶯餅 櫻 さとみ
春の雪千年前に見たやうな 広井 和之
カンラン空き缶転び山笑ふ 齋木 和俊
翔平に専念の朝春の雨 石川 春兎
うぐいすもちきなこまみれの子の笑顔 佐々木克子
電話口までの億劫春炬燵 水野 星閣
紅白梅筆筒の奥の通信簿 西前 千恵
これからは君が先頭三月尽 戸川 晟

第4回俳句研究会

4月26日(土) 立川市子ども未来センター
担当幹事 根岸敏三・秋山ふみ子・

小川紅子・石橋いろり・
青木隆・満田光生・尾崎太郎・
亀津ひのとり
参加者27名

★講話なし

たくさんの命詰まつて種袋 田村 明通
春愁は郵便ポストに放り込む 尾崎 太郎
葉桜や一年生に会釈され 松元 峯子
うどん屋に並ぶ人皆桜人 櫻 さとみ
積ん読の山に埋るる日永かな 三浦 長閑
返盃の紅ぬぐひけり花衣 淵田 芥門
花過ぎやこころに何か忘れ物 秋山ふみ子
陵のぐるり蝌蚪の国となり 満田 光生

入学式大きな傘の大教授 大森 敦夫

死ぬまでは間がありそうで落花浴ぶ 佐々木克子

通り抜け昔のことを藤の花 戸川 晟

晩春や居るはずの人居ない部屋 飯田 玉記

その一歩踏み出してみな一年生 石原 俊彦

愛燦燦アスパラガスの茹で加減 稲吉 豊

石楠花に朝日のとどく山の宿 水落 清子

この先は恩師の住居風薫る 西前 千恵

花吹雪記憶の底の父の茶毘 小山 健介

動揺は白に隠して雪柳 広井 和之

青春を織りなす日々へ入学す 松井 彰子

心平が千年を賞でる滝桜 玉木 康博

かの世にも打たせ湯のあり仏生会 亀津ひのとり

今年会うさくらやさくら夫逝く 網野 敏恵

走り根に西洋タンポポ横並び 根岸 敏三

骨ギシと鳴る甕の中友よさらば 辻 升人

〔吉野山吉水神社にて〕 蟬丸の弾きし琵琶や朧月 青木 隆

言いし老女の手は夫の額春の永別 石橋いろり

逃げ水に触れたし剥けし膝小僧 小川 紅子

第5回俳句研究会

5月24日（土）立川市子ども未来センター

担当幹事 満田光生・玉木康博・

小川紅子・大森敦夫・

尾崎太郎・石橋いろり・

根岸敏三

参加者27名

兼題「夏草」または雑詠

★講話 辻升人氏

「私が歩んで来た俳句の道」

夏草や墓だけ残る被曝の地 稲吉 豊

母に母そのまた母に百合の花 水落 清子

魂の抜けた骨なら軽からん 辻 升人

夏草やここは厨のありし場所 大森 敦夫

どこだみに生きる力をもらおうか 辻 丕子

新茶汲む醒めゆく五感生命なり 網野 敏恵

あめんぼう水面の雲を掴みとり 根岸 敏三

偶に会うカントと名乗る庭の墓 石橋いろり

公園に人居て独り花の雨 飯田 玉記

茄子の花二人の暮し八年目 田村 明通

はつ夏や付台にまづ鯨一貫 淵田 芥門

春泥や人間だもの間違える 松元 峯子

母の日や娘のおむつ替える夢 櫻 さとみ

H3失敗糧に雲の峰 青木 隆

薫風を鼻から吸つて邪気を吐く 亀津ひのとり

夏草の垂れ合つてある鉄路かな 満田 光生

黒堀の新内稽古所柿若葉 尾崎 太郎

父の日や子にプレゼントされし杖 西前 千恵

想い詰め込み圧縮袋更衣 高瀬多佳子

夏場所や青き天より跳ね太鼓 松井 彰子

夏草や鉄鎖のごとく地面這う 小川 紅子

朝食はパンと牛乳麦の秋 戸川 晟

寄居虫のカサリと転ぶ忘れ潮 三浦 長閑

陽炎を出でてこの世の闇まとう 佐々木克子

夏草に憩う小蔭の一句かな 関 梓

竹叢の空芽ゆるなり夕立過ぐ 水野 星間

つつし咲く谷根千の熟安ランチパーティ 玉木 康博

5月より兼題を設けておりますが自由です。HPでもご確認できます。

HPへの簡単アクセス

現代俳句協会↓地区活動↓東京多摩

秋の吟行会

令和7年11月1日（土）

吟行地 府中市郷土の森博物館

武蔵野が秋色に染まる頃、府中市郷土の森への吟行です。武蔵国の歴史がぎゅっと詰まった博物館や、萩、彼岸花、金木犀など郷土の森の自然を仲間と共に楽しみましょう。

お友達お誘いの上多数ご参加をお待ちしております。初めての方も大歓迎です。

（詳細は同封のチラシをご覧ください）

○

昨年の吟行最高点句

まいまいず井戸に秋日を投げ込みぬ

佐藤 栄子

事務局だより

○当協会のお知らせ等はホームページからもご覧になれます。(通見・亀津幹事担当)
「現代俳句協会」を検索し、「地区活動」から「関東ブロック」の「東京多摩」へと進んでください。

★第43回東京多摩地区俳句大会

日時 令和7年10月13日(月・祝)
場所 立川市子ども未来センター2F会議室
(JR中央線立川駅南口、徒歩13分)
投句 締切8月8日必着(お急ぎください)
講演 黒岩 徳将先生
(詳細は別紙をご覧ください。)

★会員の現況(6月末現在)

214名(正会員167名・一般会員47名)
☆新入会員 3名(敬称略) *印は正会員
*蓬田 息吹(俳号更・前月号 墨田 筆 調布市)
*加藤菜々実(日野市) 網野敏恵(国立市)

◆多摩地区協へのご入会は、随時受け付けております。現代俳句協会会員で多摩地区に在住の方は、会費は無料(新規入会の方は申し込み手続きが必要)。

その他一般の方は年会費2千円です。
お問合せ、ご連絡は事務局(下欄枠内)まで

「多摩のあけぼの」 編集担当幹事

櫻 さとみ(さ) 青木 隆(隆)

満田 光生(光) 飛永百合子(百)

永井 潮(潮)

◇◇◇◇◇ 案 内 ◇◇◇◇◇

俳句研究会

第8回 8月23日(土)

兼題「蜻蛉」

立川市子ども未来センター

立川駅南口徒歩13分

(はがき地図参照)

電話042・529・8682

第9回

9月27日(土)

兼題「鬼灯」

第10回

10月25日(土)

兼題「菊人形」

立川市子ども未来センター

(いずれも会費千円、出句三句)

○初めての方歓迎、見学も自由です。

俳句大会の投句締め切り!!

本誌に同封の多摩地区俳句大会の御案内(投句用紙)は、すでに会員の皆さんと関係者の方々に郵送しておりますが、投句の締め切りが**八月八日(金)**です。準備中の方、既に投句された方ももう一押しのご協力をお願いいたします。期日が迫っておりますの何卒お急ぎください。

編集後記

☆今号から微力ながら編集をお手伝いさせて頂きました。入力する一句一句に感銘と刺激を受け、良い機会を得たと実感しています。(さ)
☆あけぼの集および一句鑑賞文は、皆様の大切な交流の場ですのでよろしく願います。

FAXは(0426362272)迄。(隆)

☆田島健一「平成の一句」で昔(から)の句友八人の句を鑑賞。彼らは心掛けからして違っていた。反省頼り。だが、もう手遅れだ。(光)
☆入り宣言した梅雨はどこへ行つてしまったのか。それでも五七五の素材は私達の周りに点々している。心の眼でしっかりと見ておきたい。(百)

☆最近紙に字を書くことが少なくなった。万年筆はカートリッジが乾び、古いボールペンは線がかすれる。読めるが書けない文字が多い。「壮にして学べば老いて衰えず」という言葉を噛みしめている。(潮)

―題字は三橋敏雄氏―

令和七年七月三十一日発行

発行人 水野屋閣

編集人 永井 潮

発行所 東京多摩地区現代俳句協会事務局

〒181-0015 三鷹市大沢2-1-107

TEL 090-9389-4821 大森敦夫方

E-mail hitemono@ybone.jp

印刷所

株式会社 清水工房
TEL 042-6220-2626